

改訂学習指導要領生活科の「見方・考え方」を踏まえた生命尊重の心と態度を育成する教育の在り方

～「飼育・栽培」活動に着目して～

Education to foster mind and attitude to respect life based on “the viewpoints and approaches” of Living Environment Studies indicated in the revised government curriculum guideline

-Focusing on activities of “raising animals and growing plants”-

熊谷 和彦
Kazuhiko Kumagai

キーワード：生活科の「見方・考え方」 「飼育・栽培」活動
生命を尊重する教育 学習環境の実状と課題

Key word : viewpoints and approaches of Living Environment Studies activities of raising animals and growing plants education to nurture respect for life the current situation and problems of learning environment

2017.3に改訂された学習指導要領では、各教科の学習を展開するにあたっては教科の特質に応じた「見方・考え方」を生かすことが示された。そこで本稿では、生活科の身近な生活に関わる見方・考え方を視点に、飼育・栽培活動を通した生命を尊重する教育を展開しながら子どもにどのような資質・能力を育てることができるのかについて考えていく。

また、生活科で生命を尊重する教育につながる飼育・栽培活動を進めるに際して、極めて重要となる学習環境の実状と課題について探り、課題解決に向けた手立てについて論考する。

abstract

The government curriculum guideline revised in March 2017 instructs to make the most of distinctive “viewpoints and approaches” of each subject in teaching it. Upon this, this article considers what ability and quality of children we can foster by providing “education to nurture respect for life” through activities of raising animals and growing plants from “the viewpoints and approaches of Living Environment Studies related to our daily lives.” This article also tries to find out the current situation and problems of learning environment, which is crucial in carrying out activities of raising animals and growing plants in Living Environment Studies, that would promote “education to nurture respect for life” and considers measures to solve problems.

1 はじめに

文部科学省は、2017年（平成29年）10月26日に、全国の小・中・高等学校を対象にした「平成28年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の

結果を発表した。それによれば、学校におけるいじめの認知（発生）件数は 323,809 件（前年度 225,132 件）と前年度より約 98,700 件の増加となっている。このうち、小学校におけるいじめの発生件数は、237,921 件で過去最高となった^{※1}。いじめ防止対策推進法に規定する重大事態の発生件数のうち生命に関わる重大な事案は 9 件となっている。

振り返れば、2011 年 10 月に滋賀県大津市内の中学校で当時 2 年生の男子生徒がいじめを苦に自殺するに至った、いわゆる「大津市中 2 いじめ自殺事件」が誘因となっていじめ防止対策推進法は成立した。成立当時、生命を尊重する教育の重要性とその強力な推進が社会全体で叫ばれたのであった。しかし、前述の数字が物語るように今日に至るまでいじめやそれを原因とする自殺は後を絶たない。一方で、問題行動としての暴力行為の発生件数も過去最高となっている。これらの行為の背景として、「児童生徒の育成、生活環境の変化、児童生徒が経験するストレスの増大、最近の児童生徒の傾向として、感情を抑えられず、考えや気持ちを言葉でうまく伝えたり人の話を聞いたりする能力が低下していること^{※2}」などが挙げられている。

このような問題の根本的な原因の一つに、かつては子どもの生活の中で日常的に行われていたかけがえのない生命を尊重する心と態度が養われる経験や体験の不足がある。

一般に、子どもが理解と選択の能力を身に付ける幼児期から小学校の時代は、自分を取り巻く人たちとの双方向の関りを通して愛情やいたわりの心、配慮や気遣いなどを育てる時期である。しかし、急速に進む少子化にあって、現在は一緒に暮らす兄弟姉妹や同年代のいとこたちは身近にいない。進む核家族化によって家族の死を間近に目にする機会も減った。住居を取り巻く環境から、家族の一員としての動物さえも少なくなっている。その代わりに子どもの身の回りにあふれ、関わっているのがテレビゲームやネットゲームである。飼育していたカブトムシが死んだのを見た子どもが、「電池が切れたのかな」と言ったという話がまことしやかに喧伝されたことがあるが、ゲームに慣らされた思考の結果としてこれが笑い話ではない時代になってしまっている^{※3}。生命を尊重する心と態度を養う経験や体験をさせたくてもそれができにくくなっている状況がある。

このような中にあっても、子どもに自他の生命を大切にすることを理解させることは、時代がどのように変化しようとも大切な教育である。その生命を尊ぶ豊かな人間性を育むために求められるのは、子どもに生命の大切さを心から実感させることにある。

地域や家庭において生命あるものとの触れ合う機会や場面が限定されるようになってきている今、学校教育の具体的な指導場面において、死までを見据えた実感を伴う生命を尊重する学習が極めて必要なときなのである。

2 小学校における生命を尊重する教育の教育課程上の位置付け

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領の「第 1 章 総則」に、教育基本法第 1 条にある教育の目的並びに第 2 条にある 5 つの教育の目標が「前文」として設けられ、これからの学校には、こうした教育の目的や目標の達成を求めることが明記されている。5 つの教育目標のうち、4 つ目は、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」である。これは、生命を尊重する教育に関わる部分そのものである^{※4}。

改訂された学習指導要領で「生命尊重」につながる内容は教科の特性に応じて位置付けられているが、直接に関わりが深い生活科、理科、特別の教科道徳（以下、道徳科という）における生命を尊重する教育に関連する内容を整理すると次のようになる。

1) 生活科

小学校に入学した子どもは、生活科の学習で生き物と関わる。小学校学習指導要領第5節生活の第2第1学年及び第2学年の目標(2)は次のようになっている^{※5}。(下線:筆者)

(2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。

2) 理科

第1・2学年の子どもは生活科の飼育・栽培活動で動植物と関わり、それらが生命をもっていることや成長していることなどさまざまな気付きをし、それらを大切にしようとする学びをしてきている。第3学年以降の理科においては、生活科での学びを踏まえながらも生命活動をしている動植物の体のつくりや成長のきまりなどについて科学的に探究することになる。

小学校学習指導要領第4節理科の第2第3学年、第4学年、第5学年、第6学年の目標のうち、「生命を尊重する教育」に関連する部分を抜粋^{※6}(一部省略)すると次のようになる。

〔第3学年〕

(2) 生命・地球

- ① 身の回りの生物の様子についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 身の回りの生物の様子について追究する中で、主に差異点や共通点を基に、問題を見いだす力を養う。
- ③ 身の回りの生物の様子について追究する中で、生物を愛護する態度や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

〔第4学年〕

(2) 生命・地球

- ① 動物の活動や植物の成長と環境との関わりについての理解を図り、観察実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 動物の活動や植物の成長と環境との関わりについて追究する中で、主に既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力を養う。
- ③ 動物の活動や植物の成長と環境との関わりについて追究する中で、生物を愛護する態度や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

〔第5学年〕

(2) 生命・地球

- ① 生命の連続性についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 生命の連続性について追究する中で、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力を養う。
- ③ 生命の連続性について追究する中で、生命を尊重する態度や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

〔第6学年〕

(2) 生命・地球

- ① 生物の体のつくりと働き、生物と環境との関わりについての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 生物の体のつくりと働き、生物と環境との関わりについて追究する中で、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力を養う。
- ③ 生物の体のつくりと働き、生物と環境との関わりについて追究する中で、生命を尊重する態度や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

3) 道徳科

小学校における道徳教育の意義は、人間としてよりよく生きるための基礎・基本となる道徳性を育成することにある。「生命を尊重する教育」を進めるにあたっては、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生か^{※4}」しながら主体性のある日本人の育成に資することとなるよう留意することを求めている。小学校学習指導要領第3章特別の教科 道徳では内容は2学年ごとに示されている。

生命を尊重する教育に直接関係する項目は、以下のとおりである^{※7}。

「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」

〔生命の尊さ〕

〔第1学年及び第2学年〕

生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。

〔第3学年及び第4学年〕

生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。

〔第5学年及び第6学年〕

生命が多く、生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。

〔自然愛護〕

〔第1学年及び第2学年〕

身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接すること。

〔第3学年及び第4学年〕

自然のすばらしさや不思議さを感じ取り、自然や動植物を大切にすること。

〔第5学年及び第6学年〕

自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。

3 生活科、理科、道徳科の見方・考え方

今回改訂された学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）を働かせていくことが明記され、教科等の目標に示された。

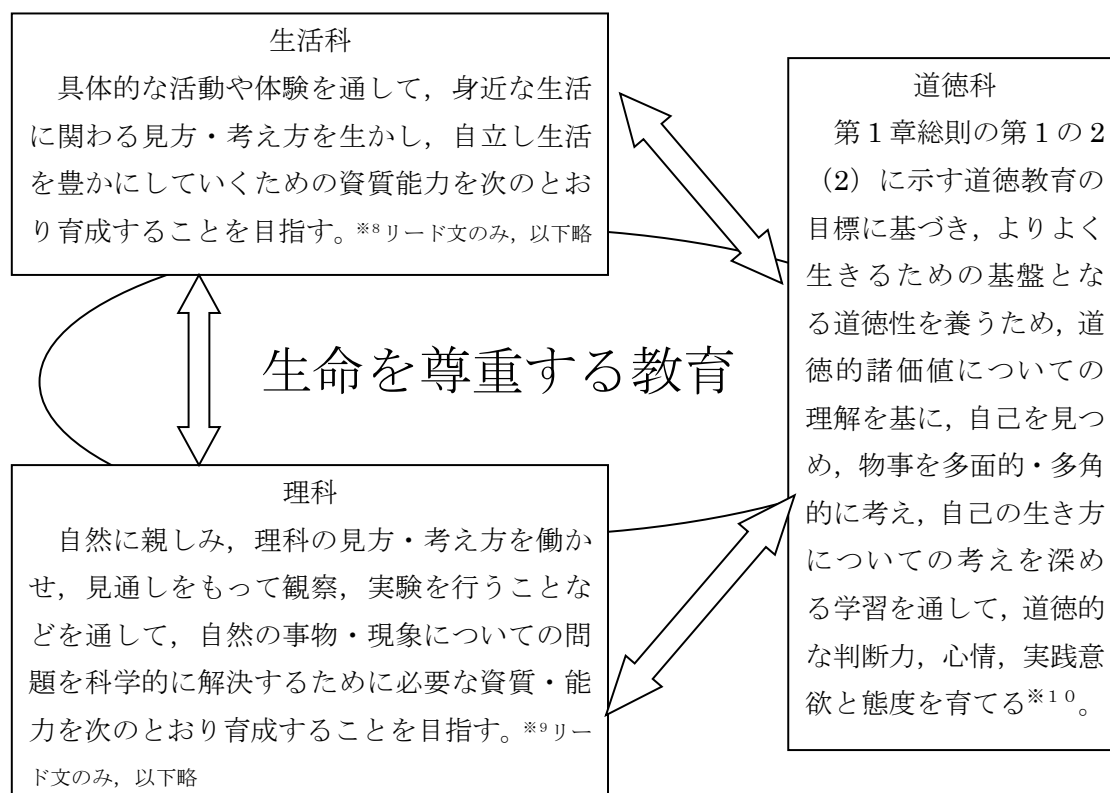


図1 生命を尊重する教育に関する生活科・理科・道徳科の相関

1) 生活科の見方・考え方を踏まえた「生命を尊重する心と態度」の育成

理科には、内容(2)「生命・地球」に生物という領域があることはこれまで見てきたとおりである。しかし、生命現象を扱うことははっきりしているものの、生命現象に対するアプローチそのものを理科の学習で扱っているわけではない。例えば、「生病老死」「生者必滅」を前提に今ある生をどのように活かしていくかという「生き方」に関わる考え方は、理科の見方・考え方としては扱わない。それは、風土や気候の中で連綿として形づくられてきた精神や諸価値を背景とする宗教、文化の中で取り扱われることになる。道徳科でいえば、生命に対する畏敬の念は理科とは異なる生命へのアプローチとして扱われるのである。

生活科では、飼育・栽培活動を通して子ども自らが動植物に関わりながら、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、生命をもっていることや成長していることに気づき、大切にするという扱いになる。生き物に直接触れ、関わりながら、生命に関するさまざまなことに気づき、考えるというアプローチとなるのである。

生活科の見方・考え方を踏まえた飼育・栽培活動を通し、「生命を尊重する心と態度」がどのような子どもの姿として表出されるのか整理すると次のようになると考える。

2) 生命を尊重する教育につながる生活科の見方・考え方による飼育・栽培によって育まれる学び

(1) 飼育・栽培を学ぶ

チャボのひなを手のひらに乗せて愛おしそうに見つめる子がいる。ウサギをだっこし小さな子をいたわるように語りかける子がいる。また、アサガオやミニトマトに「早く元気に大きくなあれ」と声をかけながら毎日水やりをする子がいる。そのような子どもの仕草

はいつの時代でも見ることでできる生命あるものと子どもとの関わりの大切な姿である。生活科における生命あるものとの関わりは、動植物が生きていることを実感し、生きているということはこのようなことなのであるという気付きそのものなのである。

飼育・栽培活動を継続していく中で、子どもは動物や植物には、それぞれ固有の特徴や性質があることに気付いていく。それは、生き物の形状、大きさ、色等であり、動物であれば、食べる物や棲み処、生活時間帯など、植物であれば、種や苗植えの時期、発芽の条件や追肥・剪定、収穫の時期などである。

これらの学びは、第3学年から始まる理科の学びにつながっていく。

(2) 飼育・栽培で学ぶ

動物を飼育する、あるいは植物を栽培するということは、大変な労力がある。飼育においては、例えば飼育している動物への新鮮で栄養を考えたえさの準備や水替え、排泄物の清掃、運動などさまざまな関わりを継続しなければならない。栽培においては、土作りに始まって、毎日の水やり、折々の追肥、草取りや剪定など収穫に至るまで手をかけていかなければならない。子どもにとっては、飼育している動物の命を守る、栽培している植物を枯死させないという強い使命感と忍耐や根気が必要となる。

動物を飼育しているうちに次第に飼育動物の警戒感が薄れて世話をする子どもになつくようになる。栽培している植物が目に見えて育っていく。そういった関わりから見えてくる様子から子どもは生命力のすばらしさを感じるのだらう。それは、直接的な関わりでしか体得することができない。

また、生命あるものに対して世話を続けるという行為は、おのずと責任感を芽生えさせる。併せて、動物がなつく、大輪の花が咲く、作物を収穫するといった結果から子どもは自身の有能感を意識し、自尊心の向上へとつながっていく。世話を継続することで自分のよさに気付いていくのである。

飼育・栽培の中で、思いがけない植物の枯死・動物の死と遭遇する場合もある。それまで「すべてのものに命がある」「動くものに命がある」などにとらえていた「生」が、「死」という現実に向き合って子どもははじめて「死」の「不動性（死んだら動かない）」や「不可逆性（死んだら生き返らない）」「不可避性（すべてのものが必ず死ぬ）」を理解し受け止めることができるようになるのである^{※11}。

関わり世話してきた動植物の病気や老化による衰弱に悩み、考え、なお当面してしまった死（枯死）を友達や教師とともに体験し、同じ思いを分かち合いながら生命の問題を共有していくことが子ども一人一人に生命の意味を実感させていくのである。

このような飼育や栽培での豊かな活動や体験は、道徳的心情を培うことにもつながっていく。

(3) 飼育・栽培に学ぶ

えさやりや水掛け、排泄物の清掃、雑草対策、病気・枯死への対応など一日でも手を抜くことはできない。

学校で動物の飼育や植物の栽培をするとき、多くの場合子ども同士が協力しながら世話をする。そこでは、動物にえさをいつ、どのように与えるか、清掃をどのように行うか、栽培している作物の生育状況をそのように把握していくかなど、一人で行うには難しい事柄について、互いに話し合い相談しながら世話に関する役割を分担していく。このようなことを通して、飼育している動物や栽培している植物のために共に力を合わせ協働していくことが大切であることが分かるのである。協力して世話をする中で、それぞれが気付い

た事柄を話し合いながらそれらを共有することができる。このことは、世話をする楽しさや意欲を一層高めるとともに、世話をしているものへもっと何かをしてやりたいという意欲につながっていく。

子ども同士が協力し合いながら飼育・栽培活動を継続していくことにより、子どもは自らの役割について責任を果たし、世話をする動植物の命を守るための思いや願いが培われていく。子ども同士の協力・協働性が育まれていくのである。

このような学びは、第3学年からの総合的な学習をはじめとする各教科における協同学習の基礎となっていく。

(4) 飼育・栽培から学ぶ

世話し続けて熟したミニトマトを収穫しサラダパーティーで友達と楽しそうに食べた子どもが、とれたての新鮮な野菜の美味しさに気付き、それまでの野菜嫌いの偏食をしなくなる。学級で友達と共有した収穫の楽しさを家族にも伝えようと家庭で野菜の栽培を始める。あまり世話をすることのなかった家の水槽の魚の世話を自分から始めるようになる。このような子どもの姿は、学校での飼育・栽培活動での学びをきっかけに、家庭における自分の役割に気付き、それを自ら果たそうとする態度となって表出されるのである。

学校での飼育・栽培活動から、家族と共にできることや家族のためにできること、家族が楽しくなることなどについて子どもの見方が広がっていくのである。

(5) 飼育・栽培とともに学ぶ

動物と触れ合いその愛らしさやぬくもりを感じて親しみをもつ、あるいは植物を育て結実したものを収穫する、生命と関わりそのすばらしさに気付いた子どもはその結果についてそれを何らかの形で表現しようとする。その活動は、飼育している動物と自分自身、栽培している植物と世話している自分自身を同化している活動といえる。これはいわば、自分自身への気付きといえるものである。

子どもは、それを身近な人、例えば家族や先生へ伝える。飼育している動物や栽培している植物をかけ橋にコミュニケーションしようとする姿である。

ときに学校で飼育する動物に関わって近隣住民からの苦情となることもある。早朝のニワトリの甲高い鳴き声、ウサギやチャボの排泄物等による悪臭、飼育・栽培に関連する虫害や鳥インフルエンザなど病気の心配などさまざまな問題に直面する場合である。これらは、子どもの手だけで解決できるものではない。動物・植物を橋渡しにした動物を巡る人々の関わりに気付いていくのである。

4 生活科の飼育・栽培活動に係る課題

生命を尊重する教育は、単に知識として伝え理解して育まれるものではない。前項で述べたとおり、動植物の飼育・栽培をとおした草花や作物、動物との関わりや触れ合いの中で、視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚の五感を通して育まれるものである。ところが、昨今の子どもを取り巻く生活環境には「生命の大切さ」を実感するものとなっていない実情がある。大人はもちろん、子どもにとっても高度情報通信ネットワークの進展やパソコン、スマホをはじめとする電子機器・メディアの発達により日常生活が便利になる一方で、何度でもリセット可能なゲームの世界に入り込み過ぎた結果、バーチャル（仮想）とアクチャル（現実）の世界の区別がつきにくく、「生命」に対する現実感覚の喪失が懸念されている^{※12}。

だからこそ、子どもへ「生命尊重の心と態度」を育むこと、とりわけ「具体的な活動や

体験を通して」体感的に飼育・栽培活動を行う生活科の学習活動を充実させることは、学校が担う重要な学習活動なのである。

では、その学校で生命を尊重する活動を展開するための前提となる学習環境がどのようになっているかについて、筆者は平成 29 年 6 月に仙台市内公立小学校 120 校を対象に動植物の飼育・栽培状況について調査※¹³※¹⁴を行った。

内容は、平成 28～29 年の 1 年間に仙台市内公立小学校で「飼った動物、育てた草花と野菜」についてアンケートするとともに、飼育・栽培活動実施上の課題についての現場教師の意識を探ったものである。

調査結果は以下のものであった。

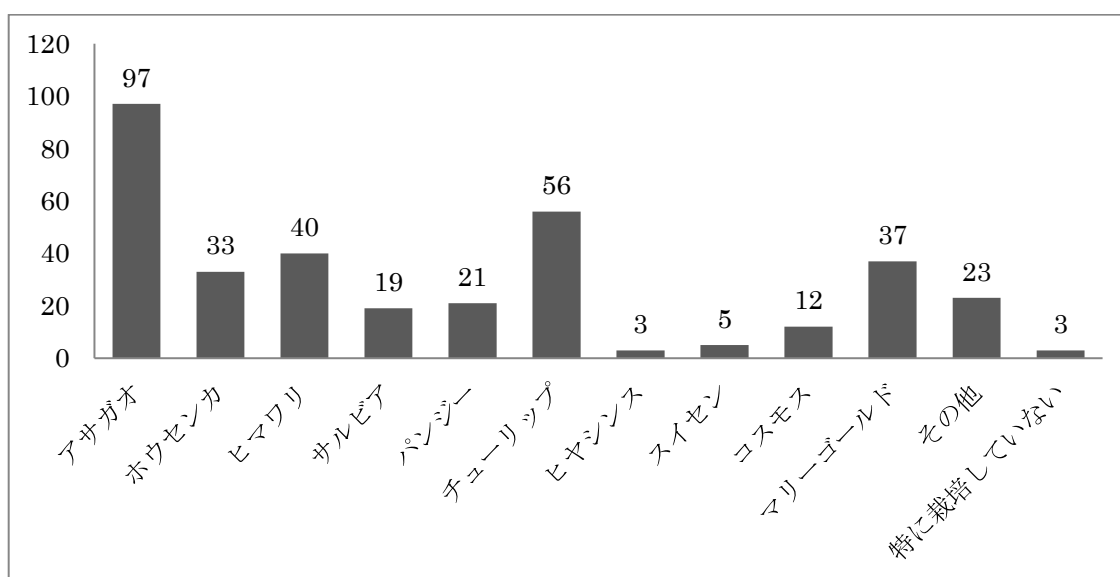


図 2 栽培した草花（どんな草花を栽培したか）

教材として取り扱っている草花として、「アサガオ」「チューリップ」「ヒマワリ」「マリーゴールド」「ホウセンカ」などが多く栽培されている。多くの学校では、学習活動の中で、さまざまな草花を栽培していることが分かる。

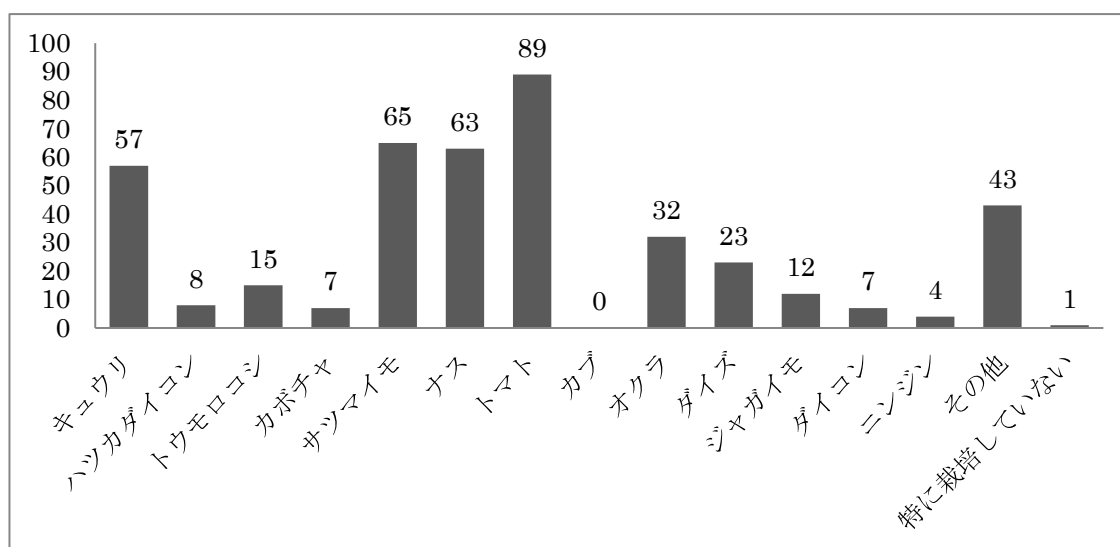


図 3 栽培した野菜（どんな野菜を栽培したか）

生活科の教材として取り扱う野菜として、「トマト」（ミニトマトが多いと思われる）「サツマイモ」「キュウリ」などが比較的多く栽培されている。「ハツカダイコン」や「トウモロコシ」「カブ」「ニンジン」「ダイコン」「ジャガイモ」の割合は少ない。

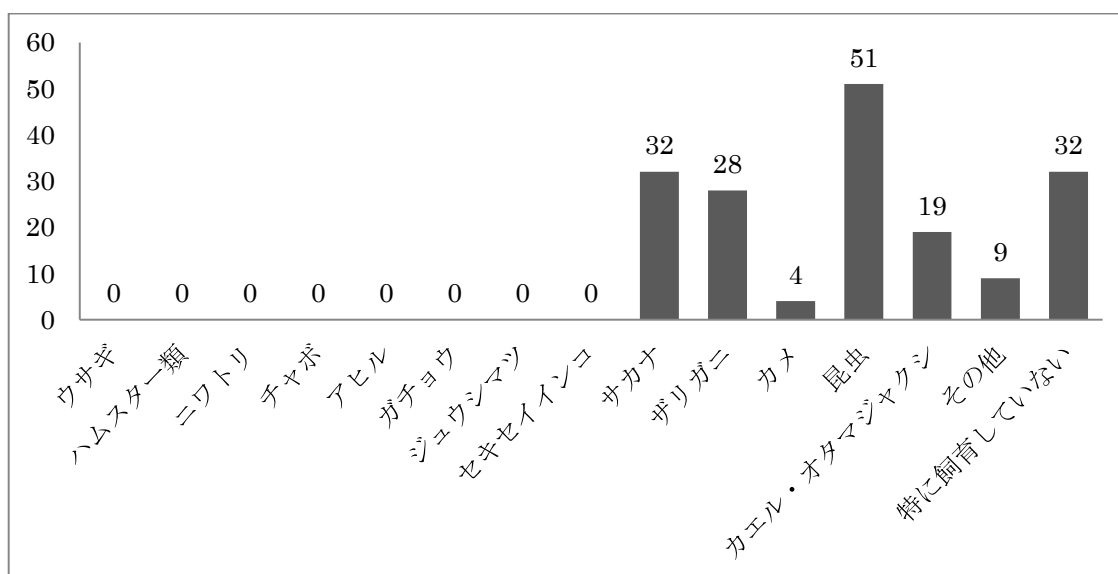


図4 飼育した動物（校舎内でどんな動物を飼育したか）

校舎内で飼育している動物は「昆虫」を除くとすべて水生の（あるいはそれに関係している）ものとなっている。「特に飼育していない」との回答が高い割合となっている。

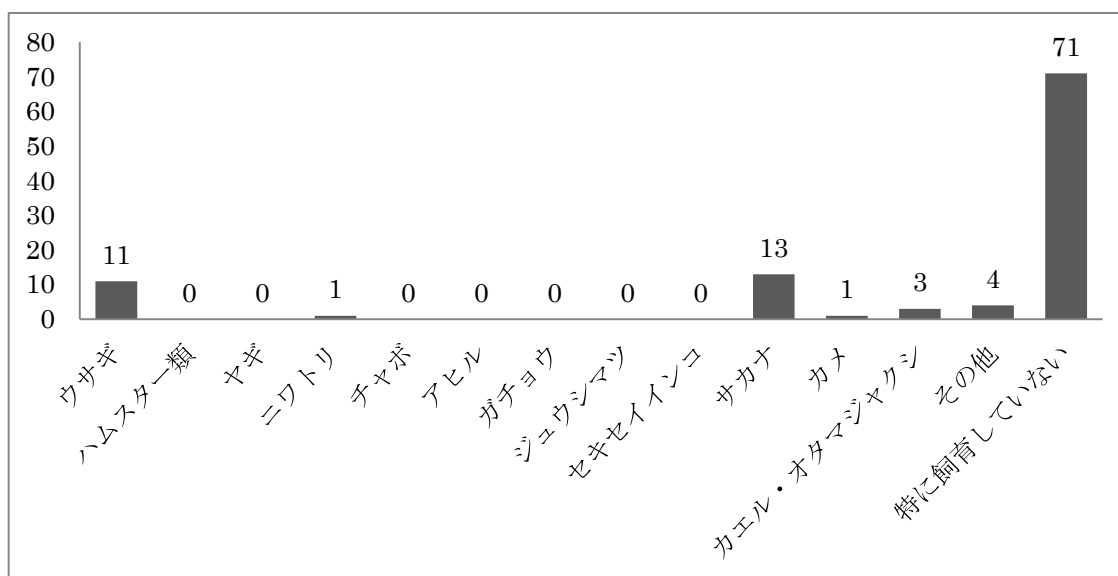


図5 飼育した動物（校舎外でどんな動物を飼育したか）

屋外で「うさぎ」「ニワトリ」を飼育している学校がわずかにある。「特に飼育していない」という学校の割合が71パーセントになっている。

5 「生命を尊重する教育」に関する課題

回答内容を「栽培している草花」「栽培している野菜」「屋内で飼育している動物」「屋

外で飼育している動物」の順で考察すると次のようになる。

ア 栽培している草花

教材として取り扱っている草花は「アサガオ」「ヒマワリ」などの比率が高い。子どもにとって、栽培が容易で関わりやすさがあるからと思われる。多くの学校では、生活科の学習活動の中で、さまざまな草花を栽培している。これらは、「発芽・成長・開花・結実・枯死」という植物の一生が容易にとらえられ、その生命を実感できる草花である。

イ 栽培している野菜

生活科で栽培する野菜として、「トマト」(含：ミニトマト)「サツマイモ」「キュウリ」などが比較的多い。これらの野菜は、栽培が容易である上、成長の様子を確認しながら収穫できるものである。「ハツカダイコン」や「トウモロコシ」「カブ」「ニンジン」「ダイコン」「ジャガイモ」の割合が少ないのは、「トウモロコシ」は結実・収穫の時期が夏休みと重なること、ほかの作物は根菜類でありその成長が可視化しにくいとめとえられる。

ウ 屋内で飼育している動物

校舎内で飼育している動物は「昆虫」を除くとすべて水生の(あるいはそれに関係している)ものとなっている。かつて生活科誕生のころは、校舎内(教室を含む)の子どもの目に入る身近な場所で、多種多様な生き物を飼育していた学校が数多くあったが、今では哺乳類や鳥類など恒温動物の飼育を屋内では一切していない。とりわけ、「特に飼育していない」との回答が高い割合を示しており、子どもに身近な場所での動物の存在が希薄になってきている状況となっている。

エ 屋外で飼育している動物

子どもが触れて温かさを感じる恒温動物の飼育は「ウサギ」「ニワトリ」に限られ、その割合もそれぞれ11パーセントと1パーセントとなっており大変少ない。教材池で飼育する「サカナ」の割合も多くはない。特に飼育していないという学校の割合が、71パーセントになっているなど現在多くの学校では屋外で継続して動物を飼育してはいない状況がある。

「生命を尊重する教育」を生活科の飼育・栽培活動で進める上で、栽培では収穫物の成長が可視化しにくい作物を取り扱わない傾向があること、飼育ではさまざまな原因で子どもが日常的に関わり触れ合う対象としての動物が学校内に存在していない状況になっていることが分かった。

ではなぜ飼育・栽培活動がこのような状況になっているかについては、記述による回答にその答えがあるように思われる。飼育と栽培に関する課題は、おおよそ次のような内容である。

【栽培関連】

- ①土・日曜日等の休日や夏季・冬季等の長期休業日の世話や栽培場所の確保の困難さ。
(耕地・校地が狭すぎることや広すぎることで、日照条件の悪さ、獣害など)
- ②つるの処理など作物を栽培する上での専門的な知識の低さ。
- ③放射能問題と関連する栽培作物の調理。
- ④雑草アレルギーがある子どもの増加・配慮とそれに関連した保護者への周知と理解を得ることの難しさ。

- ⑤栽培する植物の選定の難しさ。
- ⑥栽培する際の土中や作物にいる虫への抵抗を感じる子どもの存在。
- ⑦種・苗代や肥料代などの費用。

【飼育関連】

- ①土・日曜日等の休日や夏季・冬季等の長期休業日の世話や飼育場所の確保の困難さ。
- ②鳥インフルエンザをはじめとする動物からの感染症への不安。
- ③動物アレルギーがある子どもの増加・配慮とそれに関連した保護者への周知と理解を得ることの難しさ。
- ④直面せざるを得ない動物の「死」を子どもとどう向き合わせるかについての指導の困難さ。

6 まとめと提言

前項の課題にどう対応するかについてのヒントは、今回改訂された学習指導要領の「前文」にある。

「これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、…中略…、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」
「児童が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくことは、教職員をはじめとする学校関係者はもとより、家庭や地域の人も含め、様々な立場から児童や学校に関わる全ての大人に期待される役割である。^{※15}」

この「前文」にある内容に照らし、カリキュラムマネジメントの視点をもって生活科の飼育・栽培活動に係る学習環境の課題解決を図っていくことが肝要である。学校で抱える飼育・栽培活動に係る学校現場の課題へは、次の①～⑧などの手立てが考えられる。

- ①耕作のための土づくり、栽培する草花や野菜の選定への助言、植え時期、追肥、剪定、収穫の時期などの世話に関しては、学校近隣に居住する農家や農協、園芸センターの職員との連携を図り適宜適切な助言を得ること。
- ②施設面（耕地等）に関しては、校長の裁量権が及ぶ範囲で保護者・町内会・老人会などの協力を得ながら、子どもの学習環境整備に努めること。
- ③収穫物の調理等に関しては、学校医や栄養士等の助言を得ながら、保護者へ事前に丁寧説明していくなどその理解を図りながら進めること。
- ④世話している動物の病気対応・死因究明やその説明、動物の食物や適切な世話の仕方等については獣医師との連携を図ること。
- ⑤動物飼育で生じる教室内外の衛生状態や感染症の発生への不安に対しても、獣医師の助言をもらうようにすること。
- ⑥子どものアレルギーや鳥インフルエンザ（基本的に感染はないとされる）への保護者の不安等に関して、学校医や獣医師等との連携を図ること。
- ⑦動植物の世話に関しては教育上不可欠な重要な体験であることから、休日や長期休業中の低学年の子どもや校内の飼育委員会等の活動を一層工夫するとともに、保護者への理解を得て例えば休日の子ども持ち回りによるホームステイや学校近隣住民・老人会などの協力を模索すること。
- ⑧備品購入や肥料、えさ代などの費用に関しては学校の努力だけでは限界があることに鑑みて教育行政が費用面も含め学校の声を聞きながら検討していくこと。

生きとし生けるものへの限りない愛情，生命のはかなさの実感と死生観萌芽の原体験，小さな生命や弱々しい生命をもかけがえのないものとして認識し大切にしようとする態度などの生命尊重の教育の礎は，五感を通し間近に動植物と関わり合いながら実感をもって学ぶ生活科にある。

生命あるものの世話は時間と手間が非常にかかり学校現場では大きな負担となることは承知している。しかし，小学校低学年の時期に生命あるものと関わり具体的で豊かな活動や体験をとおして次第に身に付けていく事柄が自然事象への探究や自他の生命を尊ぶ行動・態度につながっていくことは確かである。だからこそ，飼育・栽培活動を推進するための学習環境の整備が必須なのである。

そこで営まれる活動が，長い目で見て本稿の「はじめに」で触れた子どものいじめや荒れの解消に大いに資する改善策の一つとなることを改めて訴え結びとする。

【参考引用文献一覧】

- 1 平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果（速報値）について 文部科学省 2017.10.26
- 2 暴力行為のない学校づくりについて（文部科学省報告書） 暴力行為のない学校づくり研究会 平成 23 年 7 月
- 3 学校・園での動物飼育の成果 ～心・いのち・脳を育む～ 全国学校飼育動物研究会 編著 P24 脳の発達と動物飼育 優しさと愛着，責任を育てる 唐木英明 緑書房 2006.6
- 4～10, 15 小学校学習指導要領 文部科学省 2017. 3
- 11 子どもの死生観と教育 日本人の死生観の中で，子どもに死と命をどう教えるか「こころの散歩道」2005.6 <http://www.n-seiryō.ac.jp/~usui/koneko/2005/siseikan.html>
- 12 「命の大切さ」を実感させる教育プログラム 兵庫教育委員会 2007.9 www.hyogo-ed.jp/~inochi/1/1.html
- 13 生活科の学習環境等に関する調査研究 第 3 次報告 No. 45 財団法人中央教育研究所 1993.10

【参考資料】

生活科の学習環境（飼育・栽培活動）に係る調査

1 調査の目的

生活科の全面実施の初年度であった平成 5 年度当時の調査結果を参考資料として、その時からおよそ四半世紀経過した平成 29 年度の生活科の学習環境としての学校内外の動植物の飼育栽培状況について調査し、その傾向や課題についての実相を明らかにする。

2 調査の方法

1) 調査対象 仙台市立公立小学校

2) 調査方法

- (1) 平成 28 ～ 29 年の 1 年間に仙台市内公立小学校で「飼った動物, 育てた草花と野菜」について、財団法人 中央教育研究所が平成 5 年に実施した全国調査※ 1 と同じ項目でアンケート調査し飼育・栽培活動で取り上げている動物や草花、野菜の傾向を探る。
- (2) 学校における飼育・栽培活動実施上の課題についての現場教師の意識を探る。
- (3) 生活科初期のころの全国調査の結果を参考にしながら、現在の仙台市内公立小学校からの調査内容を分析し、生活科「飼育・栽培」に係る現状の課題を探る。

※ 1：資料使用に当たっては、財団法人中央教育研究所より承認をいただいている。

3 調査の概要

1) 調査計画

(1) 調査対象

- ・仙台市内公立小学校生活科担当者（教頭、校長等を含む）

(2) 調査依頼 仙台市内公立小学校 120 校

(3) 調査内容

①調査用紙及び依頼文を配布し、対象者が『生活科』における動植物の飼育栽培に係るアンケート」に回答し、郵送。

②調査期間 平成 29 年 6 月 6 日～6 月 30 日

③回収結果

- ・調査回答についての内訳は、以下のとおりである。

仙台市内 120 校へ配布し、75 校から回答。（回収率 62.5%）

- ・調査回答についての回収結果は、以下のとおりである。

生活科主任等の教育実践者 63 名

校長：0 名，教頭：7 名，教務主任等：5 名 計 75 名

※校長，教頭，教務主任等は便宜上「学校管理者」として位置付ける。

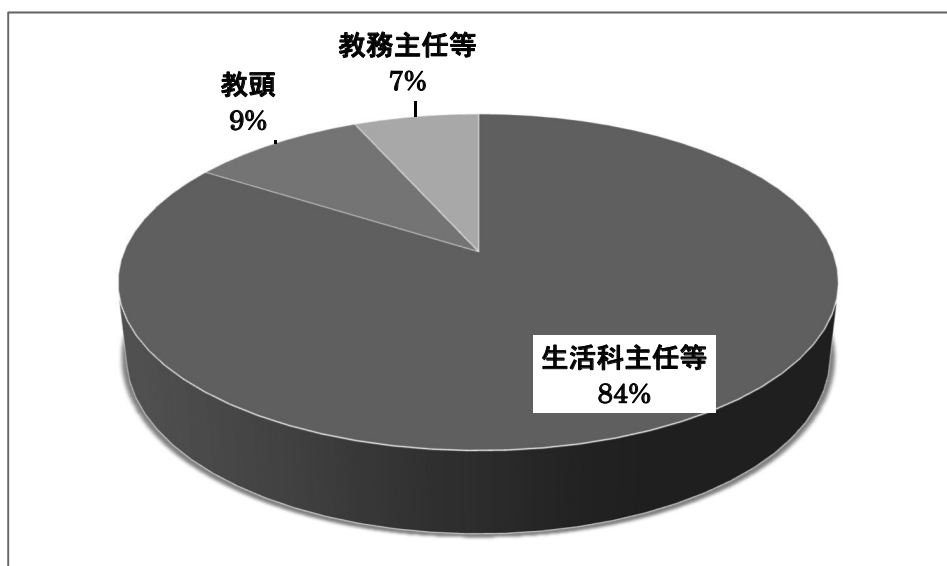


図1 アンケート「回答者の内訳」

2) 調査結果の分析

(1) 栽培した草花（どんな草花を栽培したか）

質問2 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために栽培した草花はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | |
|---------------|------------|-----------|--------|
| 1 アサガオ | 2 ホウセンカ | 3 ヒマワリ | 4 サルビア |
| 5 パンジー | 6 チューリップ | 7 ヒヤシンス | 8 スイセン |
| 9 コスモス | 10 マリーゴールド | 11 その他（ ） | |
| 12 特に栽培していない。 | | | |

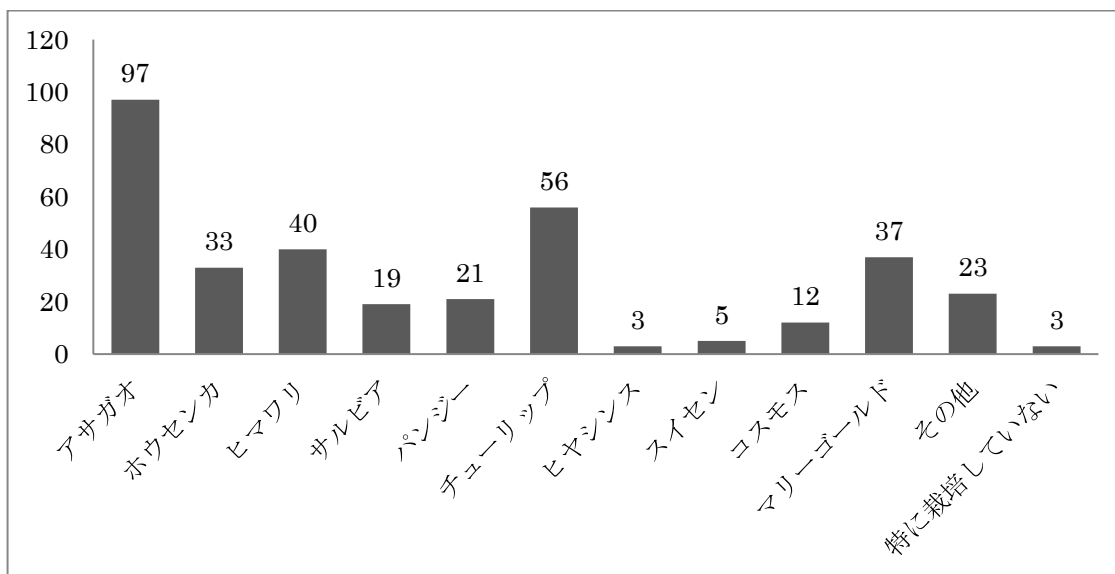


図2 平成29年度仙台市調査 栽培した草花（どんな草花を栽培したか）

「アサガオ」「チューリップ」の比率が多いのは、平成5年度の全国調査と同じ傾向であ

る。生活科教材として、栽培が適当であると考えられたものと思われる。「ヒマワリ」「マリーゴールド」「ホウセンカ」などについても同様である。特に栽培していないと回答した学校が3%ほどある。

栽培している草花の種類に関しては、生活科が誕生してから約30年過ぎようとしている現在、大きな変化はない。「発芽・成長・開花・結実・枯死」という植物の一生が容易にとらえられるとともに、児童に身近な草花が学習活動に定着してきたと言える。

(2) 栽培した野菜（どんな野菜を栽培したか）

質問3 質問3 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために栽培した野菜はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | |
|---------|-----------|---------------|---------|
| 1 キュウリ | 2 ハツカダイコン | 3 トウモロコシ | 4 カボチャ |
| 5 サツマイモ | 6 ナス | 7 トマト | 8 カブ |
| 9 オクラ | 10 ダイズ | 11 ジャガイモ | 12 ダイコン |
| 13 ニンジン | 14 その他（ ） | 15 特に栽培していない。 | |

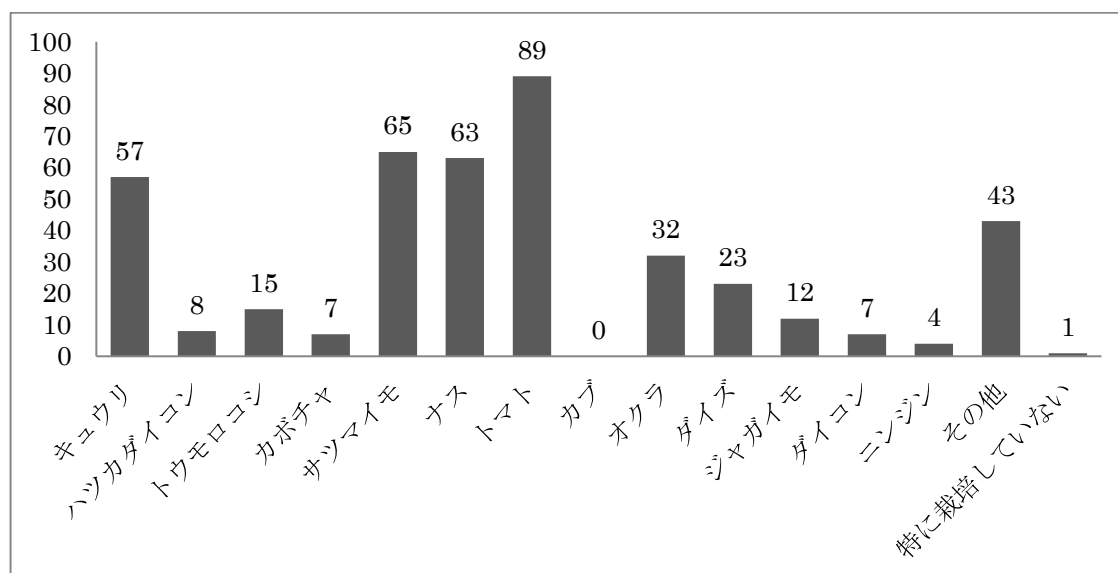


図3 平成29年度仙台市調査 栽培した野菜（どんな野菜を栽培したか）

仙台市内の小学校では、生活科誕生のころと同様に「トマト」（含：ミニトマト）が多い。「サツマイモ」「キュウリ」も比較的栽培されている。トマトも含め、栽培が容易である上、目に見える収穫が期待できるからと思われる。かつて人気が高かった「ハツカダイコン」や「トウモロコシ」「カブ」「ニンジン」「ダイコン」「ジャガイモ」の割合は少なくなっている。「トウモロコシ」は収穫の時期が夏休みと重なること、ほかの作物は根菜類ということから根菜の成長が可視化しにくいことと、子どもにとって調理しにくく好みに合致していないためではないかと思われる。（「サツマイモ」に関しては幼稚園等で栽培や食した経験があり、子どもにとってイメージしやすいので人気が高いと思われる）

(3) 飼育した動物（校舎内でどんな動物を飼育したか）

質問 4 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために、校舎の中（教室など）で飼育した動物はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | |
|----------------------|-------------------------|--------|----------------|
| 1 ウサギ | 2 ハムスター・モルモットなど | 3 ニワトリ | |
| 4 チャボ | 5 アヒル | 6 ガチョウ | 7 シジュウカラ |
| 8 セキセイインコ | 9 サカナ（コイ、フナ、キンギョ、メダカなど） | | |
| 10 ザリガニ | 11 カメ | 12 昆虫 | 13 カエル、オタマジャクシ |
| 14 その他（ ） | 15 特に飼育していない。 | | |

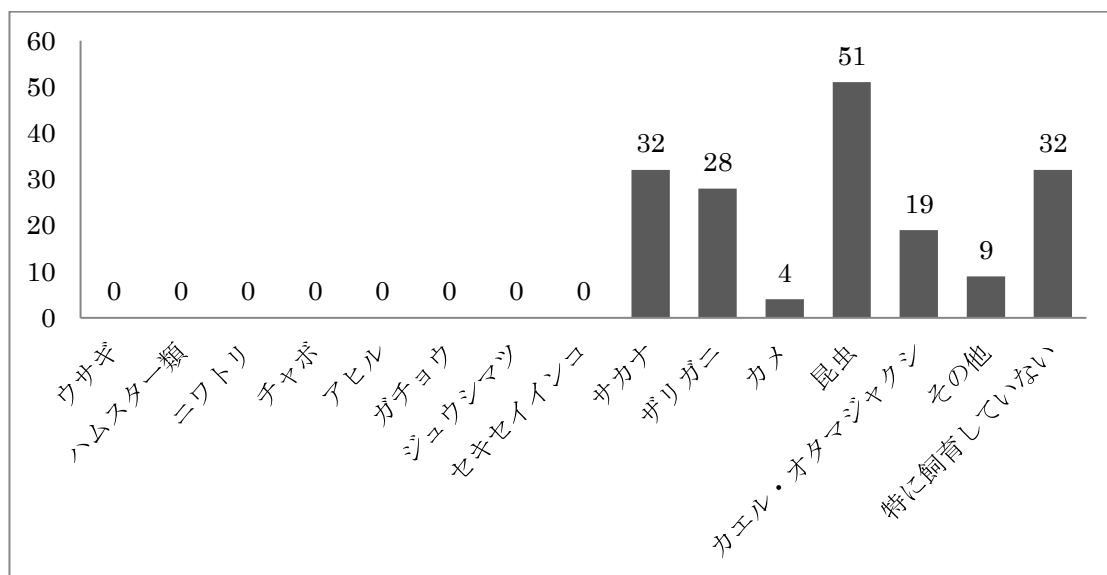


図 4 平成 29 年度仙台市調査 飼育した動物（校舎内でどんな動物を飼育したか）

平成 29 年度の仙台市内の公立小学校の校舎内で飼育している動物は「昆虫」を除くとすべて水生の（あるいはそれに関係しているのものとなっている。生活科誕生時には、校舎内（教室を含む）という子どもの目に入る身近な場所で、多種多様な生き物を飼育していたのに比べると哺乳類や鳥類など恒温動物の飼育は一切していないという現状である。鳥類は鳥インフルエンザの影響が考えられる。特に飼育していないとの回答が高い割合を示しており、子どもに身近な場所での生き物の存在が希薄になってきている傾向が感じられる。

（4）飼育した動物（校舎外でどんな動物を飼育したか）

質問 5 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために、教室の外（飼育舎・池など）で飼育した動物はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | |
|---------------|--------------------------|----------------------|----------|
| 1 ウサギ | 2 ハムスター・モルモットなど | 3 ヤギ | 4 ニワトリ |
| 5 チャボ | 6 アヒル | 7 ガチョウ | 8 シジュウマツ |
| 9 セキセイインコ | 10 サカナ（コイ、フナ、キンギョ、メダカなど） | | |
| 11 カメ | 12 カエル、オタマジャクシ | 13 その他（ ） | |
| 14 特に飼育していない。 | | | |

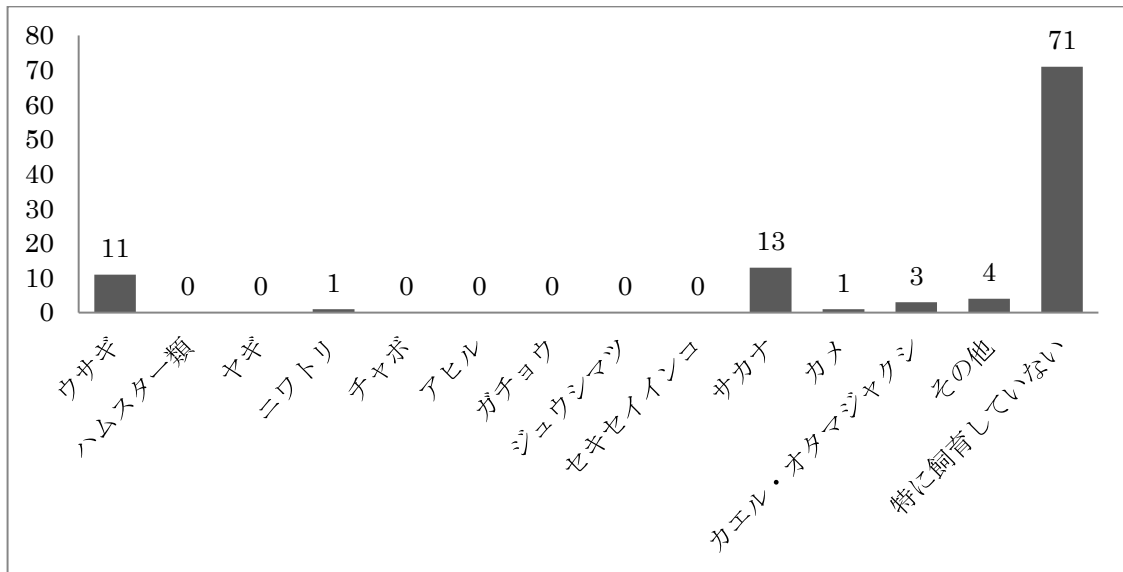


図 5 平成 29 年度仙台市調査 飼育した動物（校舎外でどんな動物を飼育したか）

平成 29 年度に屋外で「うさぎ」を飼育している学校の割合は、11%、「ニワトリ」は 1 パーセントであり、子どもが触れて温かさを感じる恒温動物の飼育は激減している。教材池で飼育する「サカナ」の割合も多くはない。特に飼育していない学校の割合が、71 パーセントになっている。多くの学校では、動物を継続して飼育していない現状があるように思われる。

（5）動植物を飼育・栽培する上での課題

質問 6 動植物を飼育・栽培する上で、課題であると思われることがあればお知らせください。

学校で、動植物を飼育・栽培する上での課題について尋ねたところ、次のような回答があった。

ア：生活科主任等

【飼育関係】

- ・アレルギー児童の増加。
- ・管理体制。
- ・土・日、長期休業中のお世話が難しい。
- ・アレルギー関連（雑種、エサ等、飼育の土）の保護者理解。
- ・以前ウサギを飼育していましたが、死んでしまっからは飼っていません。命あるものなので、教材としては何か飼育したいところですが、難しいです。
- ・長期休業中の世話の仕方。
- ・学校現場で飼育はなかなか難しい状況です。
- ・飼育環境（休日の世話、病気、獣医との連携）、子供にとっての「死」に対する思いや考え。
- ・長期休業中の世話をどうするか。
- ・夏休み等の長期休業中のお世話。生命あるものは必ず死があること。
- ・育てる対象を選ぶことが難しい（飼育環境が整いにくい）。

- ・保護者への周知，理解を得ることが難しい。
- ・設備面，人材面で十分でないところがある。
- ・長期休業や，土・日などの管理（誰が世話をするのかなど）。
- ・動物からの感染症などの心配で，ここしばらくは飼育していません。そのため，動物園，水族館での見学などに変えています。
- ・衛生面。子供が主体的に「育てよう」と思い，行動するような声掛けをすること。
- ・環境が整っていない。なかなか幅広い動物を飼育できていない。
- ・活動の途中で意識が停滞し，お世話が行き届かず生き物を死なせてしまうこと。
- ・長期休みの飼育が困難。
- ・鳥インフルエンザ等の病原菌が心配。
- ・大きな動物が死んでしまった時。感染症，ウイルス等の心配。
- ・長期休業中の対応。
- ・動物アレルギーの児童への対応。
- ・動物が死んでしまうと，次の飼育対象が見つかるまで活動ができない。
- ・児童の関心と生き物の飼育のしやすさとのバランス。飼育がうまくいかなかったときにも児童と一緒に飼育の仕方を振り返り次へ生かす。
- ・生き物を飼育するにも病気（鳥インフルエンザなど）が心配。
- ・場所の確保。
- ・休日の世話。
- ・長期休業の時の世話をどうするか。
- ・長期休業中のお世話の問題。

【栽培関係】

- ・畑の管理。
- ・放射能問題。
- ・雑草アレルギー（ブタクサ）の保護者理解と活動計画の周知。
- ・専門的な知識がないと，栽培するのが難しいと感じます。
- ・長期休業中の世話の仕方。
- ・うまく育たないものもあった（チューリップ：子供が育てたもの。キュウリ：つるの処理に困った。）。
- ・栽培場所への移動時間，秋から冬にかけてどのような取り組みができるのか。
- ・うまく育たなかった子供への対応。
- ・狭い校地（校庭が狭い，テラスが使えない等）に多くの児童一人一人の鉢等の置き場を確保することが難しい。
- ・花壇の日当たりが悪いなどの環境面。
- ・学年園として畑があります。畑を耕作するのが大変に思っています。今年度は，地域の方が協力してくれました。
- ・用地が限られているため，地域で土地を借りる（稲作）など難しいことが課題である。
- ・子供が主体的に「育てよう」と思い，行動するような声掛けをすること。
- ・一人一鉢だが，決められた花：アサガオ（教師が決めている），野菜：トマトを育てている。
- ・土の中に虫がいたり，野菜に集まったりする理由で，栽培活動に対して抵抗を感じて

いる児童もいること。

- ・出来が天候によって左右される。
- ・栽培する場所が少なかった。
- ・栽培する用地の確保と日照条件が難しいです（学年花壇の場所がどうしても日陰になり生育が難しい）。
- ・鉢物だと夏の水やり，夏休み中に収穫作業があるもの。
- ・低学年が世話するので，世話のしやすさ。
- ・栽培の場所が限られている（狭い）ため，種類に限りがある。
- ・野菜を栽培しても，放射能の件で食べられないことが課題です。
- ・畑，プランターが児童の目に届きやすい場所にある環境であること。
- ・花壇が少ない。
- ・休日の世話。
- ・二年生の野菜など長期休業時に観察がかからないようにしている。
- ・長期休業中のお世話の問題。
- ・収穫の時期が夏休みになること。収穫の頃にカラスや鳥などに畑の作物が荒らされること。
- ・児童が減っているにもかかわらず，花壇が大規模校の広さのままであること。
- ・費用面。

イ：教頭

【飼育関係】

- ・最近では，アレルギー体質の児童も多く，以前のようにウサギやニワトリを飼育するのは難しいと感じている。
- ・休業中の飼育について（管理等）。
- ・休日，長期休業中のお世話をどうするのか。
- ・さまざまな菌に感染させないようにすること。

【栽培関係】

- ・休日，長期休業中のお世話をどうするのか。

ウ：教務主任等（研究主任を含む）

【飼育関係】

- ・田んぼ，用水路での生き物探検。安全面，放課後の遊び方も含めた指導が必要であること。保護者の理解を得ることが必要だと考えています。

【栽培関係】

- ・野菜の収穫時期に害獣被害にあうことがあるため，対策を取らなければならない。
- ・子どもの動線の中に生き物を置くこと。大人の都合で管理しやすいところに置くだけでは，子供の気付きに結びつかない。どこに置こうか悩んでいます。

【引用・参考資料】

○生活科の学習環境等に関する調査研究 第3次報告 財団法人 中央教育研究所
研究報告No.45 平成5年10月

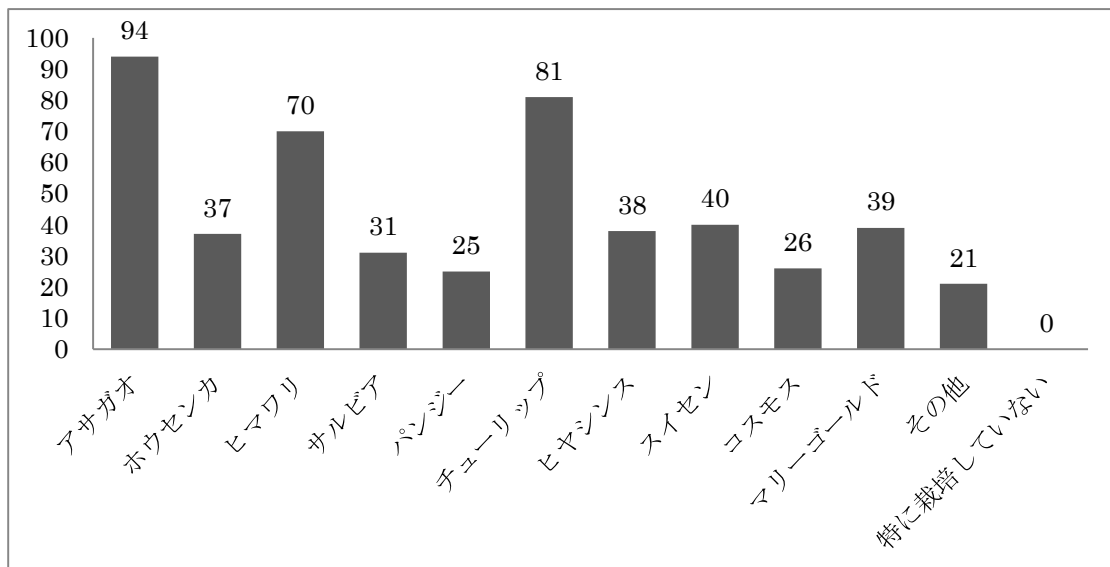
※1：資料使用に当たっては、財団法人中央教育研究所より承認をいただいている。

(1) 栽培した草花（どんな草花を栽培したか）

質問2 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために栽培した草花はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | |
|---------------|------------|--------------------------------|--------|
| 1 アサガオ | 2 ホウセンカ | 3 ヒマワリ | 4 サルビア |
| 5 パンジー | 6 チューリップ | 7 ヒヤシンス | 8 スイセン |
| 9 コスモス | 10 マリーゴールド | 11 その他（ ） | |
| 12 特に栽培していない。 | | | |

平成5年度全国調査



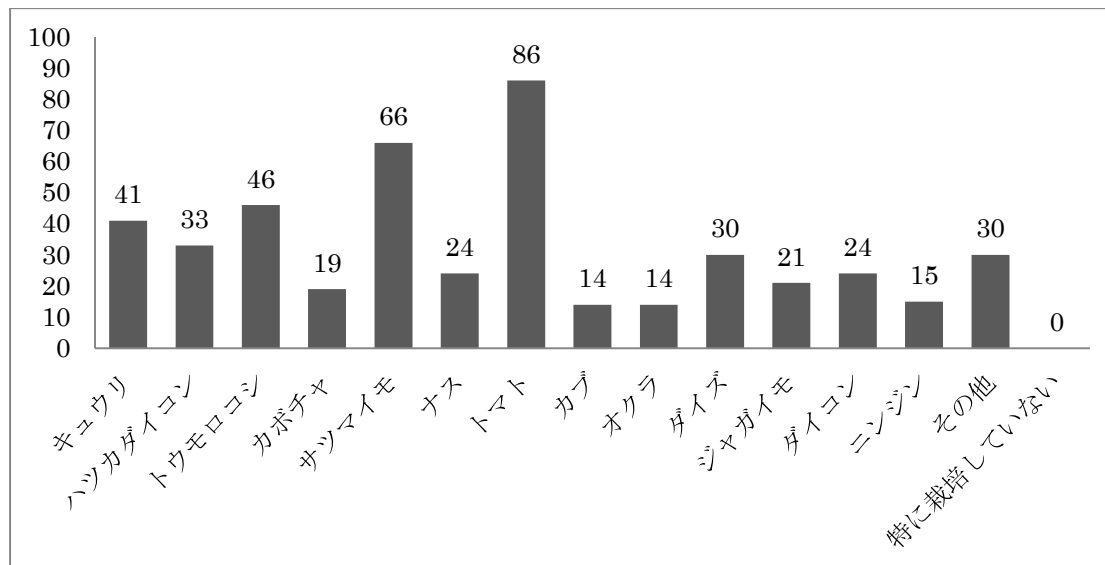
一部抜粋：「全体として、アサガオ、チューリップ、ヒマワリの栽培が顕著であり、前回の調査のときより、さらに増えている。生活科の教材として、アサガオ、チューリップ、ヒマワリの栽培が適当であると考えられたためであろうか。」

(2) 栽培した野菜（どんな野菜を栽培したか）

質問3 質問3 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために栽培した野菜はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | | | |
|--------------------------------|---------------|----------|---------|-------|
| 1 キュウリ | 2 ハツカダイコン | 3 トウモロコシ | 4 カボチャ | |
| 5 サツマイモ | 6 ナス | 7 トマト | 8 カブ | 9 オクラ |
| 10 ダイズ | 11 ジャガイモ | 12 ダイコン | 13 ニンジン | |
| 14 その他（ ） | 15 特に栽培していない。 | | | |

平成 5 年度全国調査



一部抜粋:「前回までの直植え栽培と比較して、全般的に見ると、ジャガイモ、カボチャ、オクラ以外のものは、栽培率は増えている。とくに、トマト、サツマイモ、トウモロコシ、キュウリ、ハツカダイコンの伸びは、顕著である。」

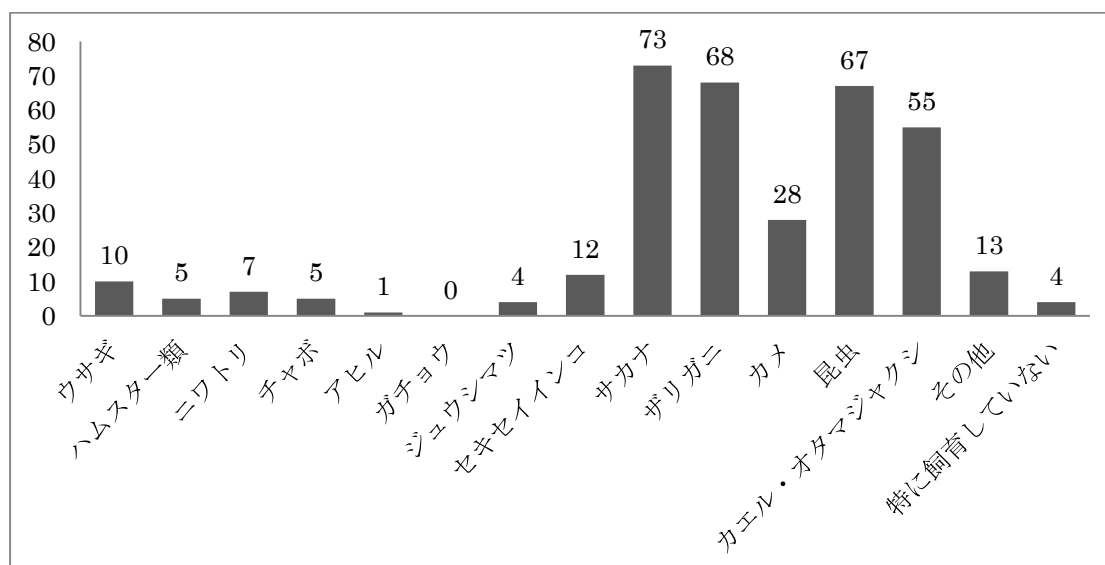
『『その他』が増えたのは、栽培した野菜の種類が増えたためであろう。』

(3) 飼育した動物 (校舎内でどんな動物を飼育したか)

質問 4 この 1 年間 (平成 28 年度 6 月から平成 29 年度 5 月末日までの間)、生活科の授業のために、校舎の中 (教室など) で飼育した動物はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- | | | |
|----------------|-----------------|--------------------------|
| 1 ウサギ | 2 ハムスター・モルモットなど | 3 ニワトリ |
| 4 チャボ | 5 アヒル | 6 ガチョウ |
| 7 シジュウカラ | 8 セキセイインコ | 9 サカナ (コイ、フナ、キンギョ、メダカなど) |
| 10 ザリガニ | 11 カメ | 12 昆虫 |
| 13 カエル、オタマジャクシ | 14 その他 () | 15 特に飼育していない。 |

平成 5 年度全国調査



一部抜粋：「前回、『飼育していない』と無回答との合計は、12%であったが、今回の調査では、4.3%に減っている。つまり、校舎内での動物飼育が約96%と、この1年間でさらに増えたことになる。」

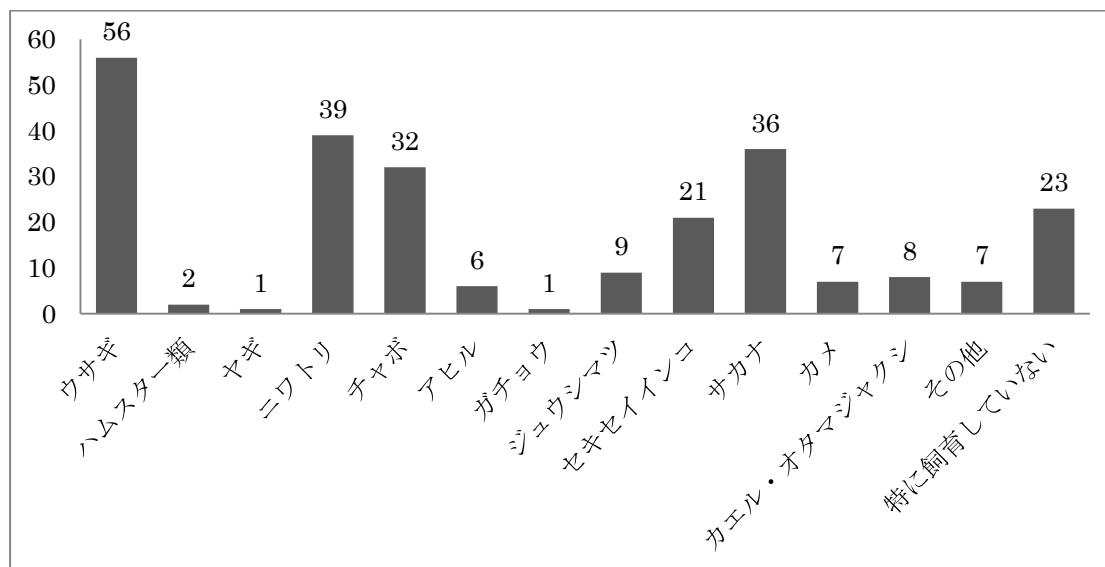
「校舎内での飼育ということから、サカナ、ザリガニ、カエル、オタマジャクシなど、水槽内で飼う動物が多いが、昆虫も67%と顕著な数字である。」

(4) 飼育した動物（校舎外でどんな動物を飼育したか）

質問5 この1年間（平成28年度6月から平成29年度5月末日までの間）、生活科の授業のために、教室の外（飼育舎・池など）で飼育した動物はどれですか。あてはまるものすべての番号に○を付けてください。

- 1 ウサギ 2 ハムスター・モルモットなど 3 ヤギ 4 ニワトリ
 5 チャボ 6 アヒル 7 ガチョウ 8 シジュウマツ
 9 セキセイインコ 10 サカナ（コイ、フナ、キンギョ、メダカなど）
 11 カメ 12 カエル、オタマジャクシ 13 その他（ ）
 14 特に飼育していない。

平成5年度全国調査



一部抜粋：「『特に飼育していない』と無回答の合計は、23%と校舎の中での飼育と比べて高い率である。飼育している動物は、ウサギ・ニワトリ・チャボ・セキセイインコ・サカナが主である。」